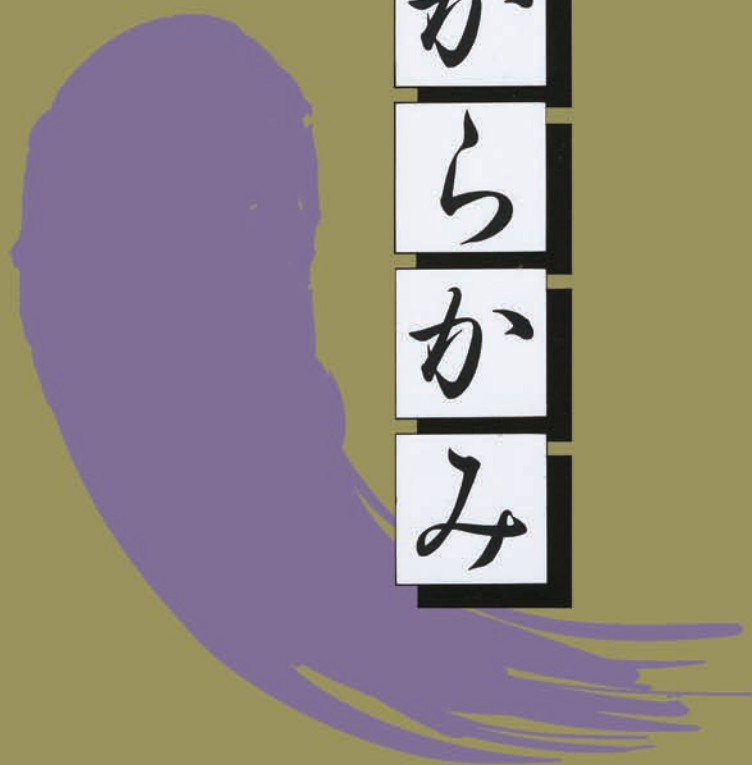


京
か
ら
か
み



ひそやかに、煌めき。

光のわずかなうつろいを感じとり、

その姿を静かに映しだす。

普段はそこにあることを忘れてしまうほど

ひっそりとした佇まいを見せながら、

ある瞬間、人をはっとさせるほど、鮮やかに煌めく。

京からかみの美は、そこに極まる。

華美に、ではなく、

ただ穏やかに優しい表情を見せながら

まるで静かな息づかいをするかのようには、

ひそやかに煌めく、京からかみ。

その優美な風合いは、

磨き抜かれた伝統の手段が生みだした

深く豊かな味わいである。

遙か昔、唐の国から渡来した紙を、人々は「唐紙」と呼んだ。唐紙はかつて唐の紙の総称であった。その唐紙の中で、特に雲母を使って紋様を刷った紋唐紙が平安時代に日本で模造され、書の料紙として愛好されるようになった。この国産の紋唐紙は「からかみ」と呼ばれるようになった。からかみは主に京都でつくられ、京都産のからかみは特に「京からかみ」と呼ばれた。

料紙として発展した京からかみは、やがて屏風や衝立などの装飾紙として使われ、江戸時代になると大量に生産され、襖紙として使われるようになったという。

その頃、京都に十数軒あったといわれるからかみ屋は、時の流れと共に少しずつ姿を消し、現在では唐長が日本でただ一軒、伝統の技を今に伝えている。洛北の山裾・修学院の工房では、今日も、親から子へ、そして孫へと、十二代にわたって受け継がれてきた伝統の手技が、京からかみを作り上げている。



板木 はんぎ

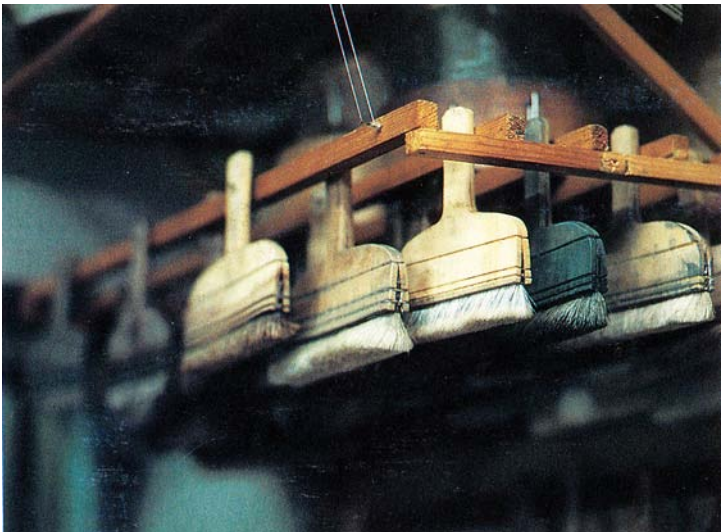
板木は京からかみの命である。唐長に伝わる約六百種の板木は、どの紋様も永い年月を経て淘汰され、洗練を極めたものだけに、いつの時代にも通じる普遍性を持つ。寛政四年に彫られた最も古い板木は、二百年を経た今もお昔と変わらない鮮やかな紋様を描き出す。

板木には、江戸期の十二枚張り、明治・大正期の十枚張り、大正・昭和期の五枚張りがあり、それぞれの数を刷り継ぐと、一枚の襖が仕上がる。大きい板木ほど時代が新しく、紙漉の技術が発達するにつれ、大きな紙が漉けるようになったことが窺える。



道具

京からかみに使われる道具は、意外に少ない。ふるい、刷毛、乳鉢、竹筒、バレン等、代々受け継がれて来た手作りの道具類は、手によくなじむ。



和紙

和紙は京からかみに掛替えのない素材である。多くの和紙の中から京からかみに適した和紙が選ばれる。京からかみにふさわしい品格を持つことから、越前手漉和紙が使われることがほとんどである。





ふのりた 布海苔炊き

布海苔は時間をかけてじっくり炊き上げていく。程よい加減になれば、裏漉しをして滑らかにする。「布海苔炊き」は、炊き上げるまでに半日近くもかかる根気のいる作業である。

ぐび 具引き

京からかみの多くは、地色をつけた染紙に紋様を刷る。地色は、紋様との調和を考慮して、胡粉あるいは雲母に絵の具を混ぜ、様々な色に染め上げる。何度も刷毛を掃き、和紙を均一にむらなく染めていく具引きは、思いがけない激しい作業である。



刷り

京からかみの技法には、板木を使う「型押し」、型紙を使う「置上げ」、金銀箔を使う「箔押し・箔ちらし」などがあるが、基本は雲母・絵の具・漆で紋様を刷る「型押し」である。
雲母を溶き、布海苔・膠・姫糊・絵の具を合わせ、これを団扇のようなふるいに刷毛で塗り、板木にふるいでつけ、その上に和紙をのせて手で刷る。雲母は紙よりも板木になじむため、手の平で撫でるようにやさしく刷り込んでいく。

桂 2001 京からかみ **お多福桐** 開版 江戸後期 使用原紙 桂 2234 雲肌



光琳手法の一つで茶人好み。
江戸後期の文様であるが、ここに使っている板木は
明治時代に彫られたものである。
ふっくらとした優しさがあ、一般に好まれている。(茶方好み)

桂 2002 京からかみ 影日向五三小桐 開版 江戸初期 再板 明治36年 使用原紙 桂 2231 雲肌



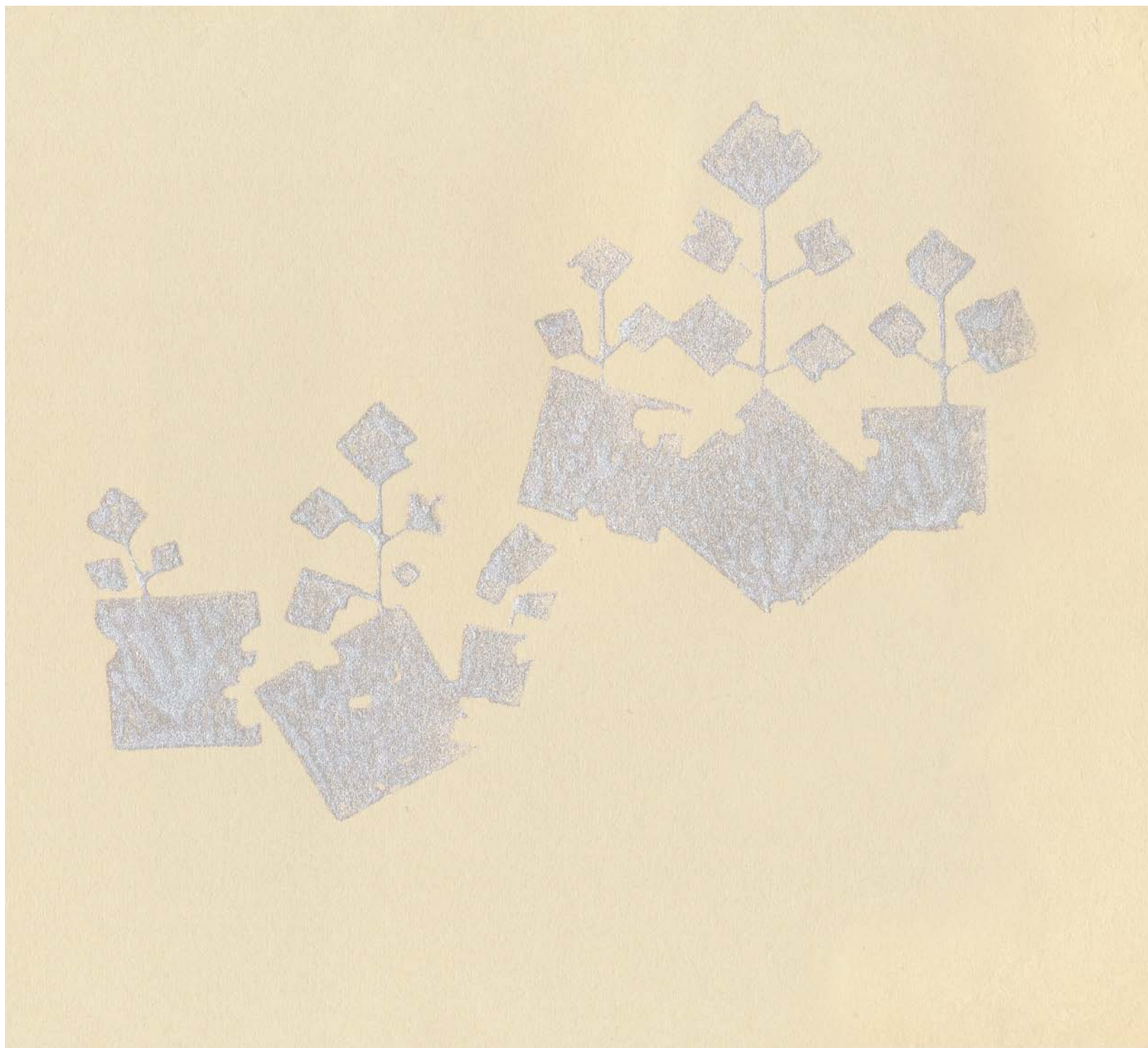
明治時代、桂離宮新御殿の一部修復の際に桂離宮創建時の板木がなく、復刻も出来ない時代であったことから、この桐文を納めたという。(御所関係)

桂 2003 京からかみ 千家中桐 (置上) 型紙製作 江戸時代 使用原紙 桂 2203 大、小もあります。



これは板木ではなく、厚手の型紙を必要な位置に置き
型紙の厚さまで雲母を盛り上げて
文様を出す置上技法である。(茶方好み)

桂 2004 京からかみ 切箔桐 開版 江戸後期 使用原紙 桂 2203



10cm 又は 13cm の金銀箔を
四ツ切、九ツ切あるいは細長く切って桐文様を表現したもので、
江戸時代の後期の作である。(武家、上流町家好み)

桂 2006 京からかみ 影日向五三小桐 開版 江戸初期 再板 明治 36 年 使用原紙 桂 2228 雲肌



明治時代、桂離宮新御殿の一部修復の際に桂離宮創建時の板木がなく、復刻も出来ない時代であったことから、この桐文を納めたという。(御所関係)

桂 2008 京からかみ 枝梅 開版 大正時代 使用原紙 桂 2203



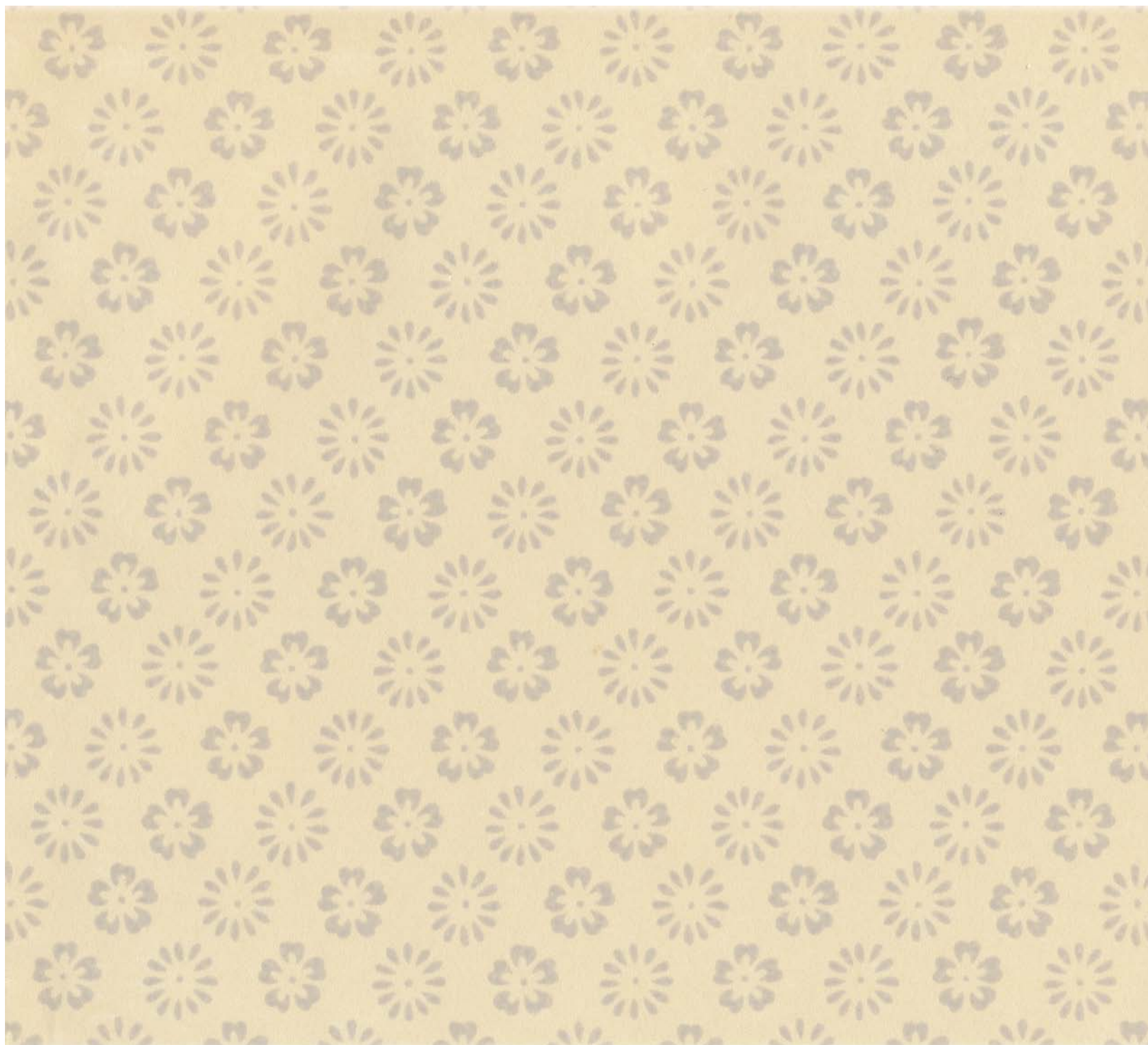
(町家好み)

桂 2011 京からかみ 春拳松 開版 大正時代 使用原紙 桂 2203



大正時代、山元春拳画伯の作。
当時爆発的に全国で愛好され、今でも人気は持続している。
柄としては剛にして密な所があり、
白地に雲母刷りのふすまは特に好まれる。(茶方、町家好み)

桂 2013 京からかみ 菊桜 開版 江戸後期 使用原紙 桂 2203



この小紋は、四筋市松と同様、
唐長を代表する木板である。

桂 2016 京からかみ 菊桜 開版 江戸後期 使用原紙 桂 2236 雲肌



この小紋は、四筋市松と同様、
唐長を代表する木板である。

桂 2020 京からかみ 一分筋 開版 明治時代 使用原紙 桂 2258



(茶方、町家好み)

桂 2021 京からかみ 三分筋 開版 明治時代 使用原紙 桂 2203



(町家好み)

桂 2045 京からかみ 波につぼつぼ 開版 天保 10 年 使用原紙 桂 2252



(茶方好み)

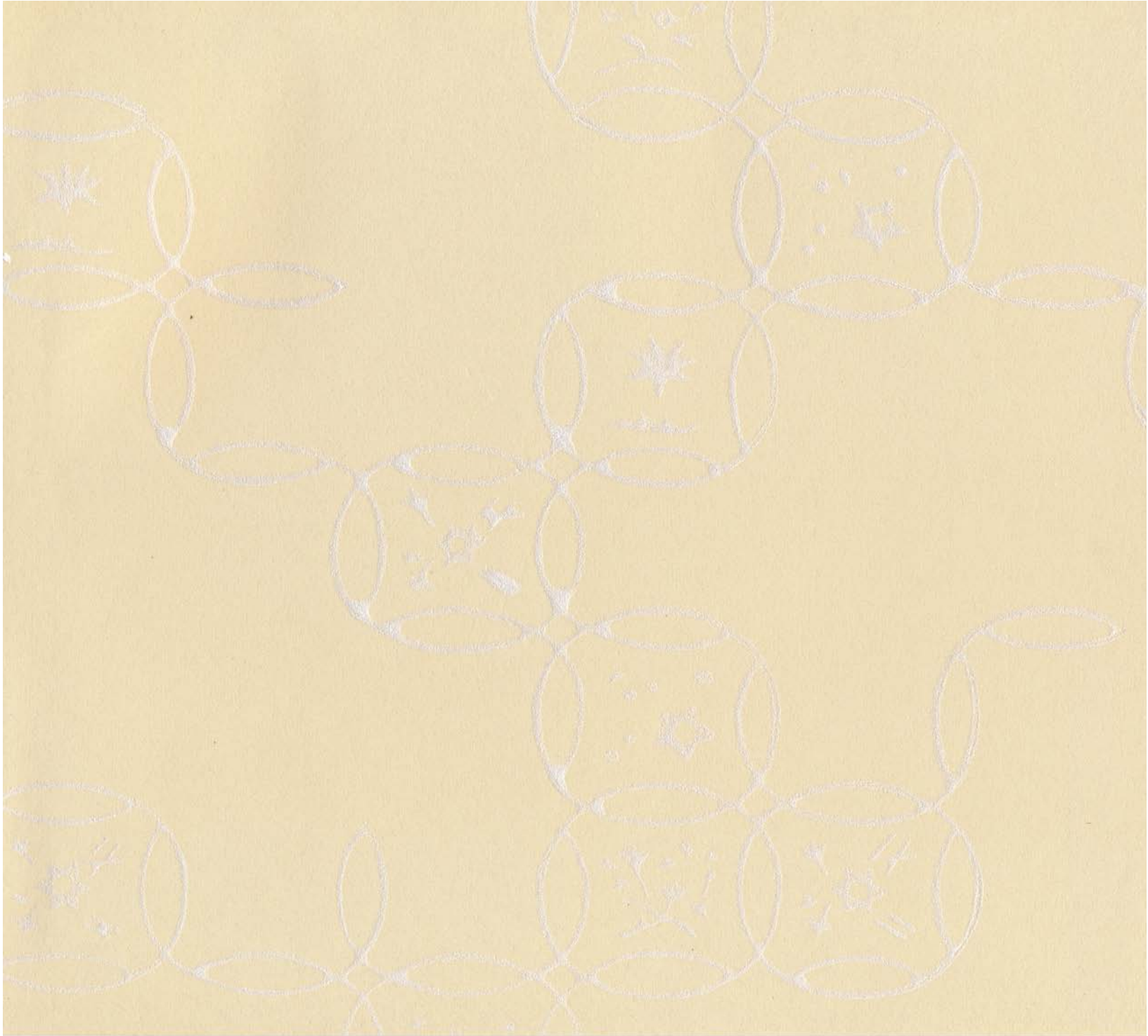
この形は広幅加工出来ません。

桂 2023 京からかみ 瓢箪 開版 明治時代 使用原紙 桂 2265



これも写生的な文様であるが、その素材と共に俳味が濃い。
瓢箪は昔からざくろと同じく種子が多いため、
子孫繁栄につながる吉祥である。
秀吉の千成瓢箪がよい例である。(町家好み)

桂 2027 京からかみ 四季七宝 開版 江戸後期 使用原紙 桂 2203



玄々斉好みと伝えられている。
茶方好みの襖文様の代表的なもの。
茶道具等にもよく見受ける文様で、
あきのこない、優れた装飾文様である。(茶方好み)

桂 2028 京からかみ 花兔 開版 江戸中期 使用原紙 桂 2259



兔が月で餅をつく話は南アジアの神話で、月中の兔は古く中国に伝わって楚辞（中支の楚国の詩集）に現れ、また漢の瓦当の押型に見られる。我国では早く飛鳥の天寿繡帳（国宝）の作土形草花兔の組合せを花兔文と呼び、幾種もの金襴の名物裂が今でもある。（武家、町家好み）

桂 2029 京からかみ 笹蔓 開版 江戸後期 使用原紙 桂 2266



竹や笹はめったに花が咲かぬという。
その花に味をつけて蔓状に表現した
名物裂笹蔓緞子の写しである。
表装の裂地、袋物にも使用される。(茶方好み)

桂 2032 京からかみ 枝紅葉 開版 明治時代 使用原紙 桂 2268



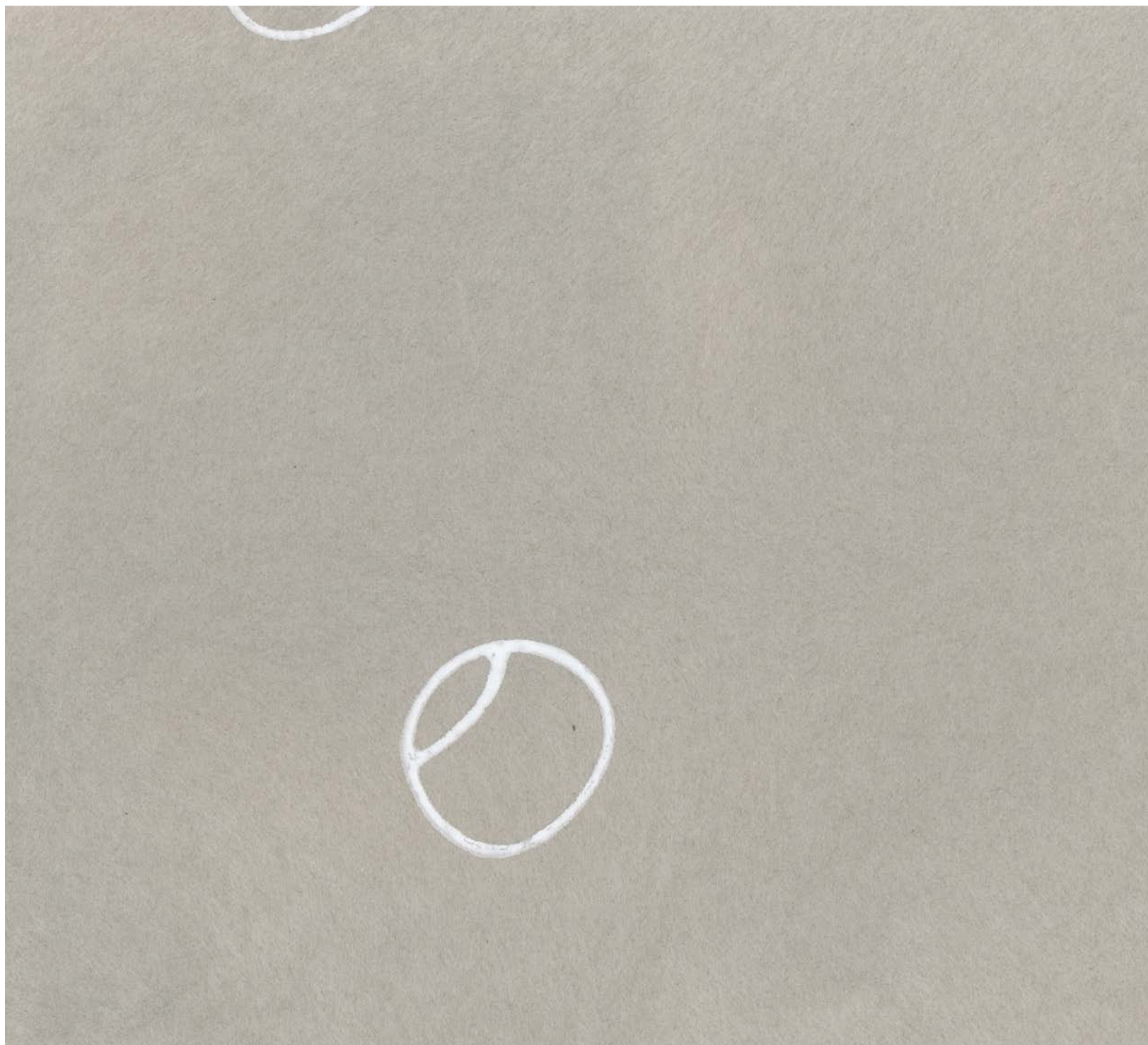
本名は楓。もみじは紅葉。古くは黄変を意味した言葉がいつか楓の通称となった。
春の桜に対し、秋の季感のシンボルとして古来歌や文様の素材に使われている。
名の起り、蛙手のように特異な葉形に注目して散らした文様とすることが多く、流水や鹿、
籠などの景物と組合せて小袖の染摺箔や織物の地文様として活躍している。(町家好み)

桂 2033 京からかみ 朽木雲 開版 江戸初期 使用原紙 桂 2203



朽木は朽ちた木の木目で文様化して朽木型という。
元来縦形のものであるのに、横にして雲文に見立てたのは、
一種の擬態というべきで、雲になってもその形は虫喰いほどの小さなものから、
この様に大きく州浜とまがうものまで、さまざまなバリエーションがある。
(町家好み)

桂 2034 京からかみ つぼつぼ 開版 江戸中期 使用原紙 桂 2240 雲肌



囲碁の碁石入れに似ている。
この様に素朴な手彫の味を生かしたものは珍しい。
風炉先屏風や、棚物などによく見られる。(茶方好み)

桂 2035 京からかみ 竜安寺文様 開版 江戸後期 使用原紙 桂 2221 雲肌



京都 竜安寺の池には水面が見えなくなる程オシドリが渡って来たという。
可愛い姿に似ず気が強いというこの鳥の感じが出ていて見あきない。
ただそれぞれの方向を向いて表現されているのが面白い。(町家好み)

桂 2040 京からかみ あじろ 開版 江戸後期 使用原紙 桂 2224 雲肌



網代は水中に立てて魚を取る道具だが、その組方を応用して竹や芦、桧板などで古くから垣、障子、屏風等に用いた。斜線が少しおおまかなこの文様は、昭和初期 唐長九代目 十代目の合作で、斜線をここまで大胆に表現した。(町家好み)

桂 2042 京からかみ 太渦 開版 江戸中期 使用原紙 桂 2255



これも細渦と同様原始文様の一つで、
現在でも広く衣類や各工芸品などに
多く使われている。(茶方好み)

桂 2043 京からかみ 細渦 開版 江戸後期 使用原紙 桂 2203



同心円文は太陽の象徴ともいわれ、
わが国では九州装飾古墳にも実例がみられる。
大、中、小、の水玉文様を配置よく散らした手描きの刷りむらがあって、
非常に味わい深いものになっている。(茶方好み)

桂 2045 京からかみ 波につぼつぼ 開版 天保 10 年 使用原紙 桂 2252



(茶方好み)

桂 2050 京からかみ さざ波 開版 大正 7 年 使用原紙 桂 2203



原紙を変えて、市松模様貼り合わせても面白い感じになる。(町家好み)

桂 2051 京からかみ さざ波 開版 大正 7 年 使用原紙 桂 2255



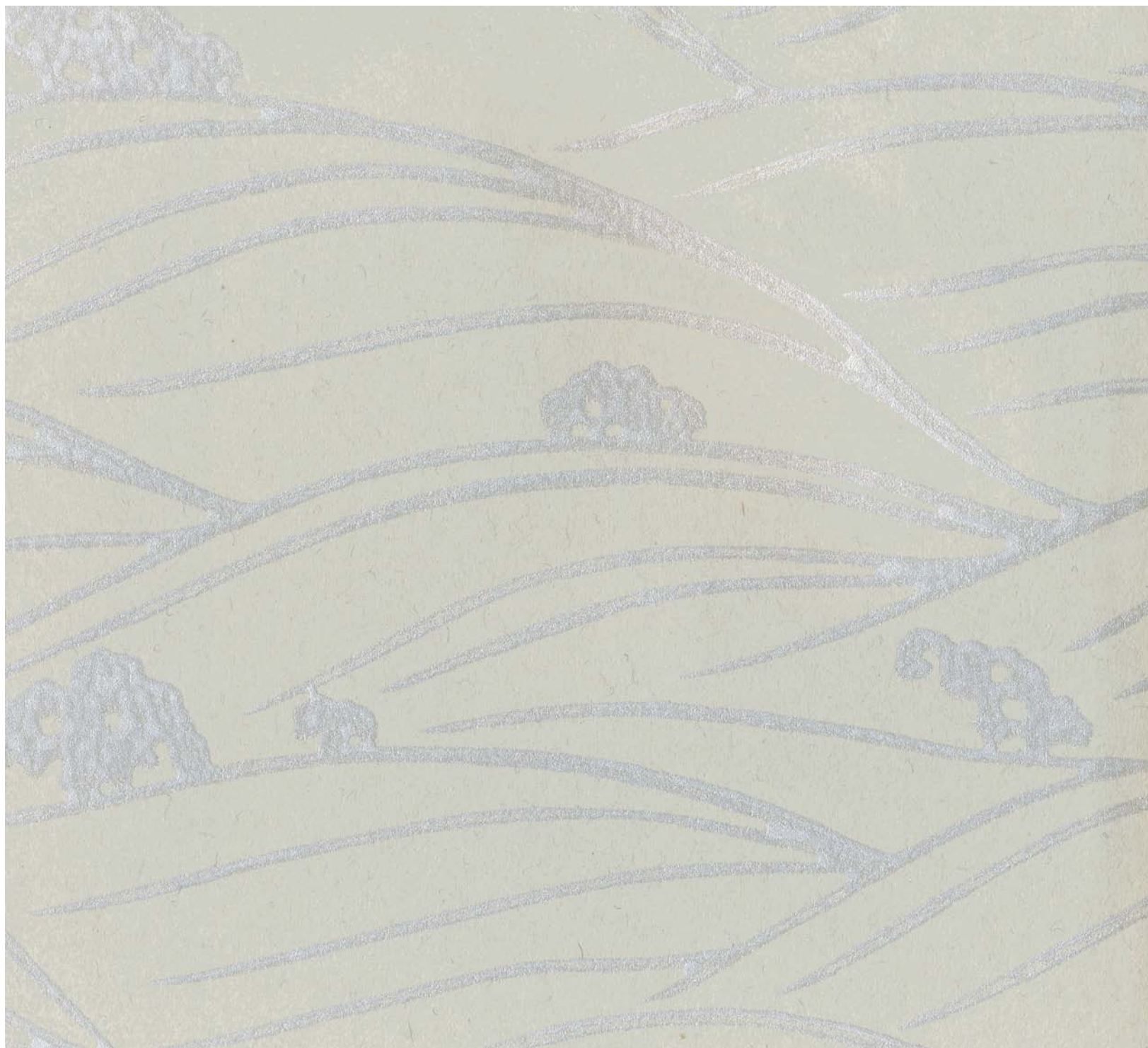
原紙を変えて、市松模様貼り合わせても面白い感じになる。

桂 2053 京からかみ 荒磯 開版 江戸初期 使用原紙 桂 2227 雲肌



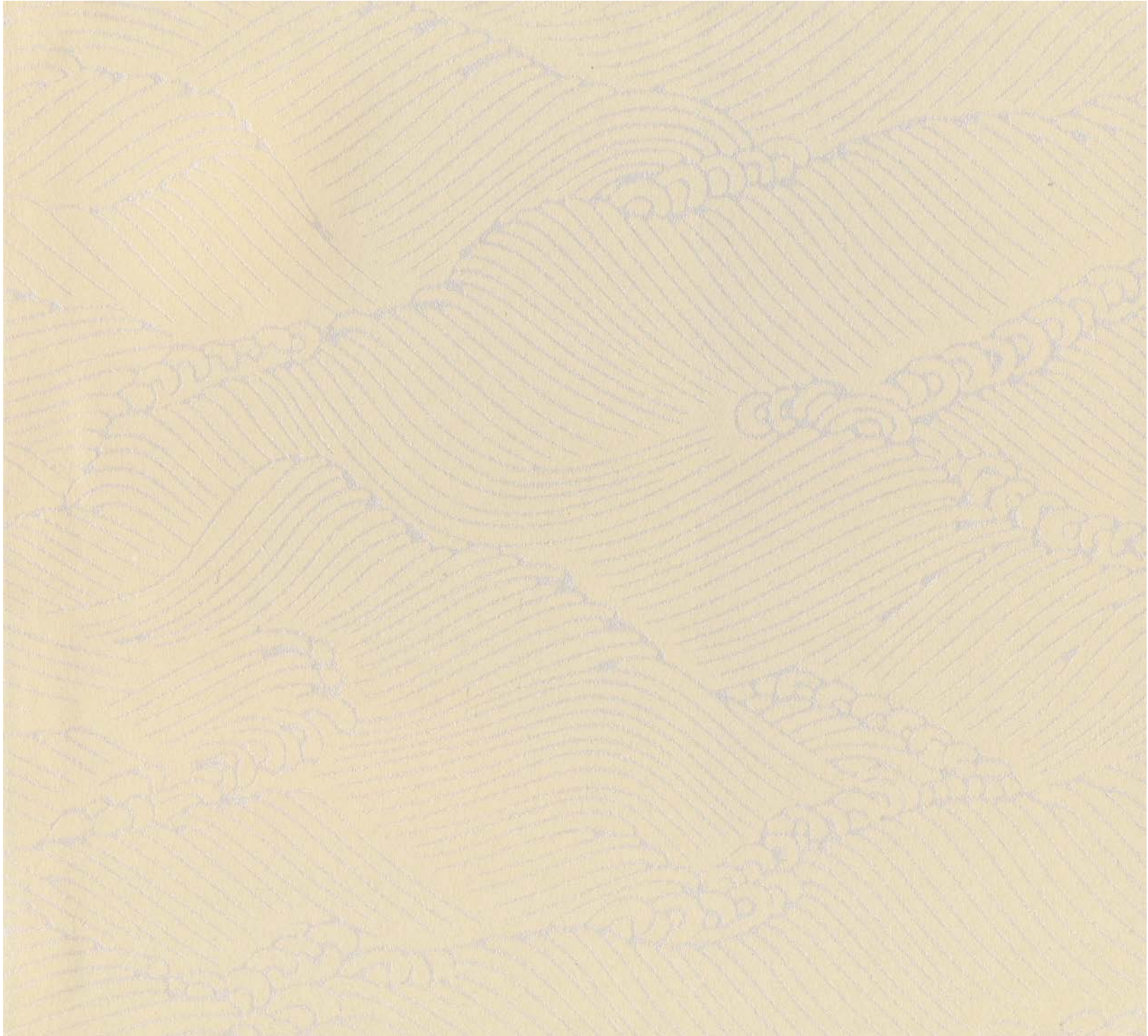
この文様は光悦の波を写したもので、
この種の波は信貴縁起などにあり、
古くから茶人に愛好された。(武家、茶方、町家好み)

桂 2055 京からかみ 稲穂波 開版 江戸後期 使用原紙 桂 2260



簡略な荒い線でゆるやかに波のうねりを示し、
ところどころに波頭でアクセントをつけたのどかな波文である。
これを豊作の稲穂に見立てて
稲穂波と言ったと伝えられている。

桂 2056 京からかみ 荒磯 開版 江戸初期 使用原紙 桂 2203



これは、光悦の波を写したものである。光琳と同じ時期に芸術活動した光悦であるが、
絵巻物や蒔絵にも古くからこの文様が見られ、
又、平安時代の料紙にもあり、装飾的效果を見せている。
特に茶人たちに好まれた。(武家、茶方、町家好み)

桂 2057 京からかみ 大荒磯 開版 江戸後期 使用原紙 桂 2270



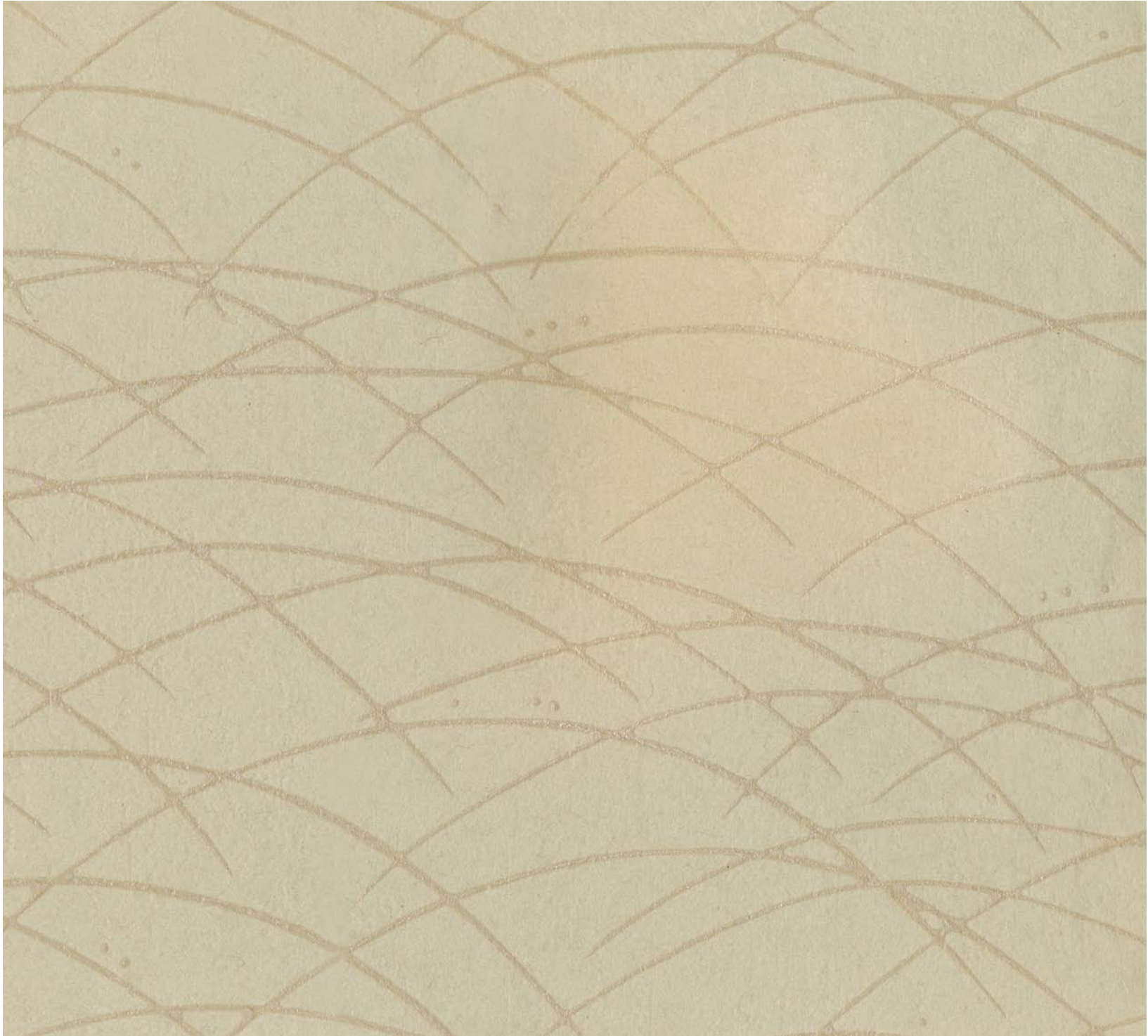
此の波は荒磯によく似ている。派手な元禄風の波である。
形は華厳縁起や室町期の土佐絵にも見ることが出来る。
古いもの程派手で豪放な動きがある。又、その頃、硯箱や印籠などの蒔絵にも
多いことから、工芸的にも適応したものと思われる。(武家、茶方、町家好み)

桂 2058 京からかみ 光琳大波 開版 江戸中期 使用原紙 桂 2257



江戸中期、最も著名な画家、工芸家であった光琳は、独自の装飾図案を創作した。今日でも光琳風、光琳文様と呼ばれ、この大波は唐長が最も好む柄である。(町家好み)

桂 2060 京からかみ 細露芝 開版 江戸後期 使用原紙 桂 2225 雲肌



藤原期に始まった草花文は、
大和絵では前景的に使われていたが、
中世の頃から主役的に扱われる様になった。
この文様は、ゆるやかな曲線が秋の原を表現している。(茶方好み)

桂 2061 京からかみ 細露芝 開版 江戸後期 使用原紙 桂 2203



藤原期に始まった草花文は、
大和絵では前景的に使われていたが、
中世の頃から主役的に扱われる様になった。
この文様は、ゆるやかな曲線が秋の原を表現している。(茶方好み)

桂 2064 京からかみ 中秋草 開版 大正時代 使用原紙 桂 2269



(町家好み)

桂 2065 京からかみ 小秋草 開版 江戸後期 使用原紙 桂 2238 雲肌



和様の草花への美的鑑賞は、平安後期頃からで、源氏物語絵巻、蒔絵刺繍、金属工芸等にも多く使われている。この図柄では、線書きで表現され、すでに装飾化されている。(町家好み)

桂 2067 京からかみ 芦 開版 昭和 10 年 10 月 使用原紙 桂 2241 雲肌



(町家好み)